

発展途上国耳科手術支援事業(2013~2018)を終えて

医) 仙台・中耳サージセンター 理事長 湯浅 涼

1. はじめに

本事業は2013年から第一次事業として3年間、第二次事業として2016年から2018年までの3年間、計6年間のブータン王国での「耳科支援手術」を2018年9月に無事終了し、この間に総計225耳の鼓膜・鼓室形成術を施行した。本事業のスタートまでの経緯ならびに2013年の2回の事業については本誌第14号に寄稿したので、今回は2014年の第3回から2018年の最終回(第8回)までの事業内容を報告する。

2. 第3回事業(首都ティンパー Thimphu 総合病院 JDWNRH 2014.9.4 ~ 9.11)

現地の耳鼻科医師ならび医療スタッフの教育のための講義集会を行い、「接着法」の解説と手術の準備、介助法、機器の取り扱い方等につき講演を行なった。その結果、翌日からの手術にその効果が表れ、現地スタッフの積極的な手術参加がみられた。チーム編成は当院の他、谷口雄一郎(聖マリアンナ医大)、山内大輔(東北大)の両先生が加わり、計7名で、30耳の手術を施行した。

3. 第4回事業(首都 JDWNRH 2015.8.27 ~ 9.5)

チームはわれわれの他、上田祥久(久留米大)、池畑美樹(兵庫医大)両医師、現地医師2名の計6名の医師により27耳の手術が行われた。今回、顕微鏡装着のCCDカメラなど供覧デバイス一式を追加寄贈したので、2列の手術が同時にモニターできるようになり、手術内容の理解に寄与した。また、初めて3列同時進行で効率よく手術が行われた。そのため、今回から現地チームのペアによる手術も初めて行われた。最終日の晩には、病院長招待の盛大な宴が行われ、現地スタッフ達と楽しいひと時を過ごした。席上、本事業を更に3年間継続するよう強く要望された。

第二次事業:(2016~2018)

4. 第5回事業(インドとの国境の町プンツォリン Phuentcholing, 2016.2.24 ~ 2.27)

これまでの4回の事業は首都の総合病院で行なわれ、患者は首都近郊居住者であった。地方から首都へのアクセスは極めて乏しく、地方都市での事業展開は必須であり、今回初めて地方都市での開催にチャレンジした。開催地のプンツォリンは首都から車で南に300km、8時間を要するインドとの国境の町で、当院の3名の他、総合病院の耳鼻科医1名とパラメディカル6名で行われた。手術用顕微鏡は当院が寄贈したものと、SPIOの助成金で購入した移動用顕微鏡の2台を陸路で運び、3日間で24耳の手術を行った。

5. 第6回事業(首都 JDWNRH 2016.8.22 ~ 8.27)

今回は再び首都で、当院スタッフに佐々木亮先生(弘前大)と上田祥久先生(久留米大、2回目)が参加し、初めて3列同時進行で26耳の手術が行われた。また、ブータンの医師3名も交代で手術を担当し、手術介助もほとんどが現地のスタッフにより行われるようになった。本事業がブータンの国営TVで放映され、最終日には首相官邸に招かれ(写真1)、トブゲー首相と1時間ほど事業報告を行った。本事業も4年目にして、ブータン政府に認められ、接着法がブータンにおける耳科手術の一つとして定着してきたことを確信した。

6. 第7回事業(中部の都市ブムタン Bumthang, 2017.8.27 ~ 9.2)

政府が用意した国内航空券により、約20分のフライトで目的地に到着したが、現地スタッフ達は顕微鏡2台を積んだトラックで悪路を丸1日かけて到着した。今回は筑波大の廣瀬由紀先生が参加し、日本からの3名の医師とブータンの医師で31耳の手術を行った。ここではいろいろなハプニングがあった。まず、2日目の午後、突然トブゲー首相が手術室に視察に来られた(写真2)。そして、本院長が自らの手術を希望され臨時手術となったが、術後1時間後のパーティに向かう際に、術後間もない院長ご自身のドライブでパーティ会場まで我々を送り、乾杯の音頭をとり、ブータンの焼酎、アラを飲み干した。さらに、最後の驚きは、院長の娘さんが父親の術後経過を見届けてから、自分も手術を受けたことであった。

7. 第8回(最終回)事業(首都 JDWNRH 2018.9.9 ~ 9.13)

第8回の最終回では、SPIOから小川郁理事が同行され、当院からの4名の他、武田育子先生(弘前大)、上田祥久先生(3回目)、細川美佳先生(むつ市)の計8名と、過去最多スタッフにより3日間で35耳の手術が行われた。最終日の夜は保健省のご招待のお別れ会が開催され、小川郁理事からのSPIOとしての本事業の目的、評価、そして今後の展望などを拝聴し、6年間の事業を無事終了した(写真3)。

最後に本事業を物心両面で支援して頂いたSPIO野村恭也理事長をはじめ小川郁理事、SPIO事務局の皆様、そして実務を支えて頂いた他大学の先生方、当院のスタッフ一同に改めて感謝申し上げます。また、本事業をきっかけに今後、日本とブータン王国との間で耳鼻咽喉科領域での交流が益々発展することを祈念する。



写真1



写真2



写真3